

6.19 生態系

6.19 生態系

6.19.1 海域生態系

6.19.1.1 調査

名護市辺野古沿岸域における海域生態系構成種の把握及び上位性、典型性、特殊性など注目種の生態、他の動植物との関係、生息・生育環境の把握等を目的として、表-6.19.1.1.2に示す項目についての調査を行いました。

なお、本項では多くの情報を取り入れて考察できるように、文献その他の資料調査（平成19年度の事業者によるインベントリー調査）の結果を含めてとりまとめました。

(1) 調査の概要

1) 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査の概要は表-6.19.1.1.1に示すとおりです。なお、調査の方法は表-6.19.1.1.3に示す現地調査の方法と同様です。

表-6.19.1.1.1 海域生態系に係る文献その他の資料調査の概要

調査項目		調査位置	調査時期
生物多様性の観点からみた主要生物群の種リスト及び希少性	インベントリー調査（海藻草類、サンゴ類、大型底生動物、魚類を対象とした生物類の目録作成）	図-6.19.1.1.2に示すリーフ内（干潟・海岸部を含む）、リーフ上及びリーフ外の計220地点	【事業者による調査（平成19年度）】 夏季：平成19年8月14日～9月13日 秋季：平成19年10月8日～11月30日 冬季：平成19年12月25日～平成20年2月17日

2) 現地調査

現地調査の概要を表-6.19.1.1.2に示します。また、インベントリー調査の方法を表-6.19.1.1.3に、調査概況を図-6.19.1.1.1に、調査位置を図-6.19.1.1.2に示します。

表-6.19.1.1.2(1) 海域生態系に係る調査の概要

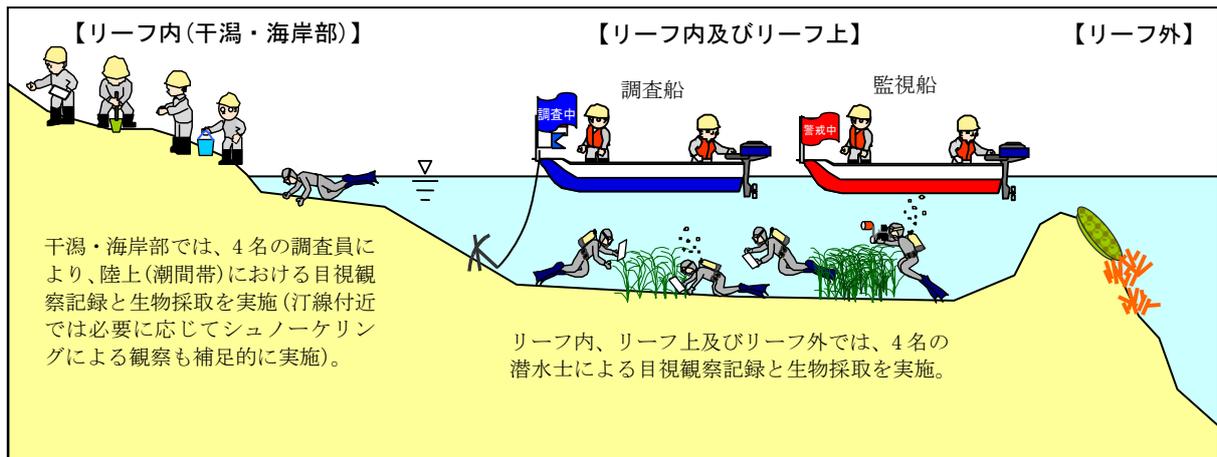
調査項目	調査位置	調査時期
海域生物その他の自然環境に係る概況	海域生物の概況	「6.13 海域生物」、「6.14 サンゴ類」、「6.15 海藻草類」及び「6.16 ジュゴン」の調査結果を整理・解析しました。
	その他の自然環境に係る概況	
	地形（水深）	「6.10 地形・地質」の調査結果を基本として、「6.13 海域生物」における干潟生物調査、「6.14 サンゴ類」及び「6.15 海藻草類」におけるライン調査等における地形（水深）の状況についての調査結果も参考にして整理・解析を行いました。
	流入河川・塩分	「6.6 水の汚れ」の調査結果を整理・解析しました。
	波浪・潮流	波浪については「6.10 地形・地質」、潮流については「6.6 水の汚れ」の調査結果を整理・解析しました。

表-6. 19. 1. 1. 2(2) 海域生態系に係る調査の概要

調査項目	調査位置	調査時期	
海域生物その他の自然環境に係る概況	その他の自然環境に係る概況		
	海底基質	非生物的基質である底質の状況については、「6.6 水の汚れ」、「6.10 地形・地質」、「6.13 海域生物」における干潟生物調査、「6.14 サンゴ類」及び「6.15 海藻草類」におけるライン調査等の調査結果を整理・解析しました。また、生物的基質であるサンゴ類、藻場等の分布状況については、「6.13 海域生物」、「6.14 サンゴ類」、「6.15 海藻草類」等の調査結果を整理・解析しました。	
生物多様性の観点からみた主要生物群の種リスト及び希少性	海域生物等	「6.13 海域生物」、「6.14 サンゴ類」及び「6.15 海藻草類」の調査結果を整理・解析するとともに、海藻草類、サンゴ類、大型底生動物（貝類、甲殻類、棘皮類）及び魚類については、種リストを充実させるため、下記のインベントリー調査を実施しました。	
	インベントリー調査（海藻草類、サンゴ類、大型底生動物、魚類を対象とした生物類の目録作成）	<table border="1"> <tr> <td>図 -6.19.1.1.2 に示すリーフ内（干潟・海岸部を含む）、リーフ上及びリーフ外の計 220 地点</td> <td> 春季：平成 20 年 3 月 18 日～5 月 8 日 夏季：平成 20 年 6 月 28 日～8 月 29 日 秋季：平成 20 年 10 月 1 日～11 月 8 日 冬季：平成 20 年 12 月 1 日～平成 21 年 1 月 17 日 </td> </tr> </table>	図 -6.19.1.1.2 に示すリーフ内（干潟・海岸部を含む）、リーフ上及びリーフ外の計 220 地点
図 -6.19.1.1.2 に示すリーフ内（干潟・海岸部を含む）、リーフ上及びリーフ外の計 220 地点	春季：平成 20 年 3 月 18 日～5 月 8 日 夏季：平成 20 年 6 月 28 日～8 月 29 日 秋季：平成 20 年 10 月 1 日～11 月 8 日 冬季：平成 20 年 12 月 1 日～平成 21 年 1 月 17 日		
海域の生態系を構成する大きな要素となる海浜生態系、干潟生態系、藻場生態系、サンゴ礁生態系の構成及び個々の関連（海域との関わりがある河川を含む） 主要な生物及び生物群集間の相互関係（食物連鎖等）	海域生物、その他の自然環境に係る調査結果、並びにインベントリー調査結果に基づき、以下の整理・解析を行いました。 (ア) 個々の生態系の類型区分とその分布 (イ) 個々の生態系の類型区分ごとの動植物の種の構成 (ウ) 個々の生態系における主要な食物連鎖、栄養段階 (エ) 個々の生態系における主要な食物連鎖、栄養段階がそれぞれ関連する海域生態系としての食物連鎖、栄養段階		
注目種等の生態、生育・生息環境の状況	海域生物、その他の自然環境に係る調査結果、並びにインベントリー調査結果に基づき、以下の整理・解析を行いました。		

表-6. 19. 1. 1. 3 インベントリー調査の調査方法

調査項目	調査方法
インベントリー調査	<p>名護市辺野古の前面海域及び大浦湾を中心に、バン崎から前原地先にかけてのリーフ内（干潟・海岸部を含む）、リーフ上及びリーフ外を調査海域として、調査海域全域を均等に網羅するように計 220 地点の調査地点を設定し、それぞれ以下に示す方法により、海藻草類、サンゴ類、大型底生動物（貝類、甲殻類、棘皮類）及び魚類を対象として、各地点において目視観察、標本の採取、写真撮影等を行い、調査海域に生育・生息する生物種の目録作成を行いました。</p>
干潟・海浜部	<p>干潮時に調査を実施しました。各調査地点の潮間帯を中心とした 50m 程度の範囲に存在する種々の環境に着目し、4 名の調査員により目視観察及び生物採取を一定時間（調査地点の環境の多様性により 20～40 分）行った後、各調査員の目視観察記録及び採取生物を持ち寄り、確認種の記録、写真撮影等を行いました。なお、汀線付近においては、必要に応じてシュノーケリングによる観察も補足的に実施しました。採取した生物については、現地において種が同定された個体は現地で放流しましたが、詳細検討が必要な個体は最小限の試料を持ち帰り、室内にて種の同定を行いました。また、分類上標本が必要と判断された場合には、試料の一部を持ち帰って標本作製しました。</p>
リーフ内、リーフ上、リーフ外	<p>4 名の潜水士により調査を実施しました。各調査地点において東西南北方向の水中写真を撮影した後、50m 程度の範囲に存在する種々の環境に着目し、目視観察及び生物採取を一定時間（30 分程度）行い、確認種を記録しました。採取した生物については、現地において種名等を記録した後に放流しましたが、現地での目視観察や写真では同定が不可能な個体は最小限の試料を持ち帰り、室内にて種の同定を行いました。また、分類上標本が必要と判断された場合には、試料の一部を持ち帰って標本作製しました。</p>



海岸部における調査



採取した生物の確認・記録



リーフ上における調査



リーフ外における調査

図-6. 19. 1. 1. 1 インベントリー調査の現地調査概況

3) 現況調査

現地調査のほかに、工事中及び供用後の環境の状況を把握するために行われる事後調査や環境監視調査を効率的・効果的に実施するためのデータの蓄積を目的として、海域生態系についての調査を行っているところです。参考として、これらの調査結果を参考資料(平成21年度～平成22年度調査)に掲載しました。

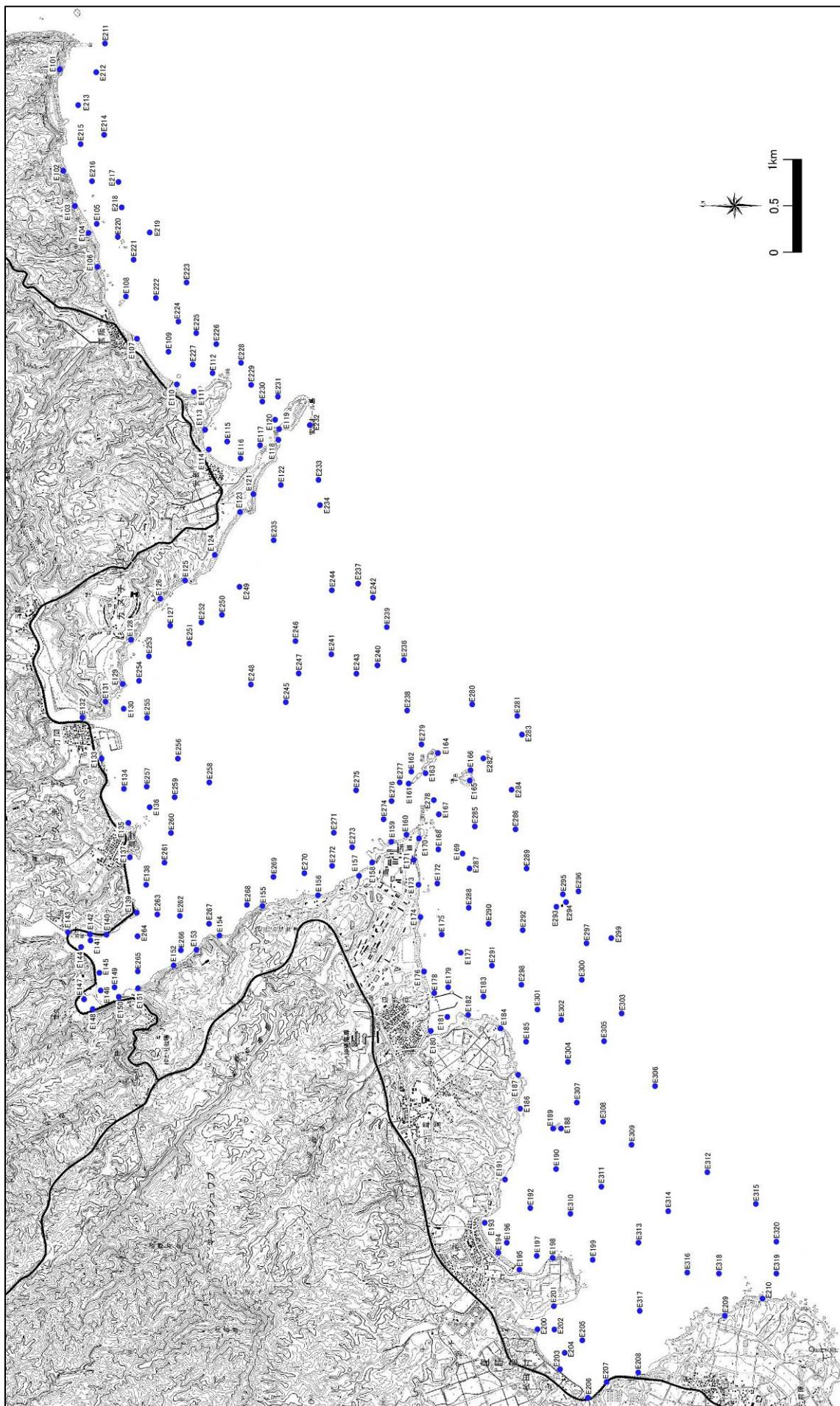


図-6.19.1.1.2 インベントリー調査地点 (●)で示したE101～E320の220地点

(2) 調査結果

1) 海域生物その他の自然環境に係る概況

(a) 海域生物の概況

動植物プランクトン、魚卵・稚仔魚、底生動物、魚類、潮間帯生物及び干潟生物についての調査結果は「6.13 海域生物」に、サンゴ類についての調査結果は「6.14 サンゴ類」に、海藻草類についての調査結果は「6.15 海藻草類」に、ジュゴンについての調査結果は「6.16 ジュゴン」に、それぞれ示したとおりです。これらの調査結果に基づく海域生物の概況を以下に示します。

a) 植物プランクトン

調査時期を通じて 100～140 種類が出現し、沖縄島沿岸に一般的にみられる種のほか、比較的外洋性の種類も確認されています。主な出現種は、珪藻綱のキートケロス属、ニッチア科、ハプト藻綱、プラシノ藻綱、ペリディニウム目に属する種などとなっています。調査地点ごとの種類数及び細胞数には、一定の分布傾向は認められません。

b) 動物プランクトン

調査時期を通じて 120～140 種類が出現し、節足動物門甲殻綱の橈足類（カイアシ類）や軟体動物門（貝類の幼生）などの沿岸域で一般的にみられる種類のほか、外洋性の種類や付着・底生性の種類も確認されています。主な出現種は甲殻類のオイトナ属、パラカラヌス属、軟体動物門腹足綱の幼生などとなっています。種類数は辺野古前面のリーフ外、大浦湾口部の長島北側、大浦湾の中央部から沿岸部西側にかけての地点で比較的多く、個体数は大浦湾沿岸部の西側から湾奥部にかけての地点で多い傾向にあります。

c) 魚卵・稚仔魚

魚卵は調査時期により 30～60 種が出現し、夏季に多く冬季に少ないという沿岸域における一般的な傾向にあり、アオブダイ亜科や単脂球形卵などが主な出現種となっています。種類数は大浦湾口部の長島北側、辺野古前面のリーフ内外、大浦湾の湾口部から沿岸部東側にかけての地点で多く、個数は辺野古前面のリーフ外、大浦湾の湾口部から長島北側にかけての地点で多い傾向にあります。

稚仔魚は調査時期により 20～50 種が確認されていますが、魚卵のような季節的な変動傾向は認められません。主な出現種はハゼ科、スズメダイ科、イソギンポ科、トウゴロウイワシ科などとなっています。調査地点ごとの種類数及び個体数には、一定の分布傾向は認められません。

d) 底生動物

マクロベントスは調査時期により 140~200 種類が出現し、夏季に比較的種類数が少ない傾向にあります。主な出現種としては、有孔虫類やゴカイ綱の種類があげられます。また、メイオベントスは調査時期を通じて 40 種程度が確認され、線形動物門、有孔虫目、ソコミジンコ類などが主な出現種となっています。

マクロベントスの種類数は大浦湾の湾口部、湾奥部、辺野古前面のリーフ内で多く、個体数は有孔虫類が多く出現した地点で多い傾向にあります。有孔虫類を除いた個体数の分布には、明確な傾向は認められません。また、メイオベントスの種類数は大浦湾の沿岸部、辺野古前面のリーフ内から西側の久志前面にかけての地点で多く、個体数は辺野古前面のリーフ内から西側の久志前面にかけての地点で多い傾向にあります。

メガロベントスについては、サンゴ類の調査時（ライン調査、スポット調査）に潜水目視観察により約 120 種類が記録されており、出現地点数が多かった種類はナガウニ属、ツマジロナガウニ、ミナミタワシウニ、アオヒトデなどとなっています。また、後述するインベントリー調査においては、貝類、甲殻類及び棘皮類の合計で 1,000 種類前後が調査時期を通じて確認されています。

e) 魚類

調査時期を通じて 280~360 種類が出現し、テンジクダイ科のキンセンイシモチ、スズメダイ科のロクセンズメダイ、ルリスズメダイ、ナガサキスズメダイ、ニセネッタイスズメダイ、ベラ科のハラスジベラ、ミツボシキューセン、アイゴ科のアミアイゴなどが主な出現種となっています。

各調査地点における出現種類数やその分布傾向は調査時期を通じて比較的安定しています。最も多くの種類が出現したのは、大浦湾の湾口部と辺野古前面のリーフ内の地点であり、最大で 90 種類以上が出現しています。次いで嘉陽前面の東側や大浦湾の東西の沿岸部の地点で 70~80 種類と多く、大浦湾奥部や辺野古リーフ内の多くの地点では 50~60 種類が出現しています。これに対して、辺野古前面のリーフ外、大浦湾の沖合及び中央部から沿岸部にかけての水深の深い地点における出現種類数は 10 種類未満と顕著に少なくなっています。

f) 潮間帯生物

目視観察では植物 40~70 種類、動物 130~190 種類が確認され、植物では藍藻類、サビ亜科（無節サンゴモ類）などが、動物ではヨメガカサ、イボタマキビ、レイシダマシなどが頻繁に観察されています。また、坪刈りもしくは堆積物採取による調査では、植物 20~70 種類、動物 110~150 種類が確認され、植物ではホンダワラ属、ヒメハモク、ウミウチワ属、ソゾ属などが、動物ではフ

タモチヘビガイ属、オハグログキ、ヤッコカンザシゴカイ、オオイワフジツボなどが優占的に出現しています。

g) 干潟生物

目視観察では植物 40～60 種類、動物 160～220 種類が確認され、植物ではアオノリ属、アオサ属などが、動物ではタテジマヨコバサミ、ミナミコメツキガニなどが頻りに観察されています。また、堆積物採取による調査では、植物 10～40 種類、動物 120～200 種類が確認され、植物はカサノリ、ヒトエグサ、トゲノリ、ウミウチワ属などが、動物ではニマイガイ綱のアシベマスオ、ゴカイ綱のアルマンディア属などが優占的に出現しています。さらに、スポット調査では、植物 20～30 種、動物 110～140 種類が確認され、植物ではアオノリ属、アオサ属、サビ亜科（無節サンゴモ類）、イトグサ属などが、動物ではミナミコメツキガニ、スナモグリ科などが多くの地点で出現しています。

h) サンゴ類

大浦湾では湾口部、湾奥部及び湾東側に被度 25%以上でサンゴ類の分布域が存在し、その周囲には被度 25%未満でサンゴ類が分布しています。辺野古崎の前面から西側にかけてのリーフや、嘉陽前面を中心とした安部崎からバン崎にかけてのリーフに分布するサンゴ類のほとんどは、被度 25%未満となっています。

また、比較的大規模なサンゴ群生として、大浦湾のユビエダハマサンゴ群生、アオサンゴ群生、塊状ハマサンゴ属群生、ハマサンゴ科群生、辺野古地先の塊状ハマサンゴ属群生、ダイオウサンゴ群体の計 6 群生が確認され、いずれの群生も白化、食害、病気・腫瘍等はほとんどなく、良好な生息状態にあります。

i) 海藻草類

調査海域には、アマモ類などの種子植物で構成される海草藻場と褐藻類ホンダワラ類で構成されるホンダワラ藻場が存在しています。

海草藻場はリーフ内の比較的静穏な水域に分布し、辺野古地先、大浦湾奥部、安部の湾内、ギミ崎の東側において比較的被度が高い箇所がみられます。これに対して、ホンダワラ藻場は波浪の影響が大きなリーフ上やリーフ外縁に広く分布しており、辺野古地先、大浦湾口部、安部～嘉陽地先に比較的被度が高い箇所がみられます。

j) ジュゴン

沖縄島全域を対象とした生息状況調査の結果、ジュゴンは辺戸岬沖、塩屋沖及び安部～嘉陽沖で観察され、特に安部～嘉陽沖（安部崎からバン崎にかけての範囲）で頻りに観察されており、嘉陽地先のリーフを越えてリーフ内に移動する状況が観察され、リーフ内の海草藻場において食跡が継続的に確認されていることから、主な生息・摂餌の場としてここを利用しているものと推定されます。なお、大浦湾にも進入する状況が稀に記録されています。

k) ウミガメ類

ウミガメ類の遊泳は、ジュゴンの生息状況調査時に調査対象範囲のリーフ外の海域全域で広範囲に確認されています。また、海浜部への上陸の痕跡は、嘉陽地先から安部周辺の砂浜において頻りに観察されており、大浦湾東側の汀間川河口に近い砂浜や辺野古弾薬庫地先、辺野古から豊原地先、宜野座村前原地区の砂浜においても記録されています。

l) その他（オカヤドカリ類等）

オカヤドカリ類は、安部崎から前原地先にかけての海岸部・海浜部のほぼ全域に広く分布しています。また、夏季の調査では汀線付近で繁殖行動（放仔行動）を行っていることが確認されたほか、オカヤドカリ類は汀線付近と後背植生との間を移動していることが考えられます。

(b) その他の自然環境に係る概況

a) 地形（水深）

辺野古崎から西側の海域では、海岸から1～1.5kmにリーフがみられます。リーフ内の水深は概ね3m以浅であり、最も浅い場所では干潮時に海底面が干出します。リーフの外洋側は非常に複雑な礁地形（礁縁部～礁斜面）となっており、水深40mまで急斜面を形成しています。また、名護市～宜野座村界付近には、リーフを切るように水深10mの谷地形がみられます。リーフ内の沖側は全般にサンゴ類・岩礁などにより形成された小規模で複雑な地形が広く分布し、その内側（岸側）は礫質もしくは砂質の底質からなる比較的平坦な地形となっています。また、水深0m以浅の潮間帯から背後の陸域にかけては、砂浜もしくは干潟が分布しています。干潟は潟原、久志及び辺野古川河口に形成されています。

大浦湾は、湾口部のほぼ中央に中干瀬と呼ばれるリーフが形成されており、最も浅い場所の地盤高は局所的に0mよりも高くなっています。この背後（湾内）には10m等深線で囲まれる非常に複雑な地形が存在し、両者を合わせた規模は湾口部方向に1.5km、湾奥部方向に2kmの幅となっています。また、安部崎から汀間川にかけても、海岸から0.5km付近までリーフや岩礁がみられ、干潮時には一部が干出します。一方、辺野古側は海岸線付近の水深10m程度までの範囲は緩やかな勾配ですが、その沖合から急斜面となって大浦湾に侵入する海底谷へと至っています。海底谷の深さは最大69mで海釜状の地形を呈しており、水深5mにおける最も狭い幅は約400mです。この谷は、辺野古側の海岸線に平行に大浦湾奥部の二見付近まで、約4kmの長さとなっています。大浦湾の東側には、もう1本の比較的緩やかな海底谷が入り込んでいますが、前述の谷のような海釜地形を持たず、水深25m程度の緩やかな勾配となっています。これらの谷地形の底は、緩やかで比較的平坦な地形となっており、細粒分（シルト・粘土分）を比較的多く含む砂泥質の堆積物に覆われています。湾中央部から湾奥部は緩やかな勾配で平坦な地形となっていますが、汀間漁港から瀬嵩にかけての海岸には岩礁やサンゴ礁が存在し、比高は小さいが複雑な地形となっています。水深0m以浅の潮間帯から背後の陸域にかけては、砂浜もしくは干潟が分布しています。干潟は大浦湾の最奥部にあたる大浦及び二見地区の前面に形成されています。

大浦湾東側の安部崎からバン崎にかけては、海岸から1km付近までにリーフや岩礁がみられ、リーフ内の沖側は全般にサンゴ類・岩礁、その内側（岸側）は礫質もしくは砂質の底質からなる比較的平坦な地形となっています。

b) 流入河川・塩分

調査海域には二級河川の汀間川をはじめとして、計 16 河川が流入しており、大浦川や辺野古川の河口部に分布する干潟域では、干潮時に塩分が低下する傾向が認められることから、汽水域となっていることが示唆されます。

なお、水質については COD 及び SS が全域で 1mg/L 前後と清浄であり、DO は夏季の底層において 6mg/L 以上で貧酸素化する傾向は認められません。

c) 波浪・潮流

(ア) 波浪

大浦湾内及び辺野古崎から西側にかけてのリーフ内の波向は 0.1~0.6m であり、いずれも静穏な状態にあります。波の周期は 3~8 秒で概ね風波の領域にあると考えられます。辺野古崎沖合のリーフ外では、東~東北東からの波が多く観測されていますが、大浦湾沿岸や辺野古リーフ内では海岸線に直角に交わる方向の波向が多く、地形による屈折等の影響が考えられます。

なお、台風来襲時（平成 19 年 7 月の沖縄島を直撃した台風 4 号来襲時）の波高は、大浦湾口東側の水深 20m の地点で 10m 程度と最も大きく、大浦湾の最奥部にあたる水深 1~2m の地点においても 1m 程度の波高が観測されています。

(イ) 潮流

辺野古リーフ内の流向は複雑ですが、平均流速は 5cm/s 前後と小さいです。また、恒流（平均流）からみた流れの傾向は、海岸に沿った西~南西向きの流れとなっています。一方、辺野古崎から西側の礁縁部~礁斜面及び大浦湾口部中央のリーフ（中干瀬）では、リーフでの砕波によって生じる海浜流がみられ、比較的流れが速く、流向も複雑となっています。

大浦湾内の平均流速は 5cm/s 前後であり、恒流（平均流）からみた流れの傾向は、上層では湾奥部から湾口部に向かって流出する流れ、下層では湾口部から湾奥部に向かって流入する流れとなっています。このような流れは、大浦湾の東岸及び西岸沿いの水深が深くなっている場所で特徴的にみられます。また、大浦湾内に流入する流れは、大浦湾の東岸や長島~辺野古崎間のような海浜流が卓越している場所でもみられます。

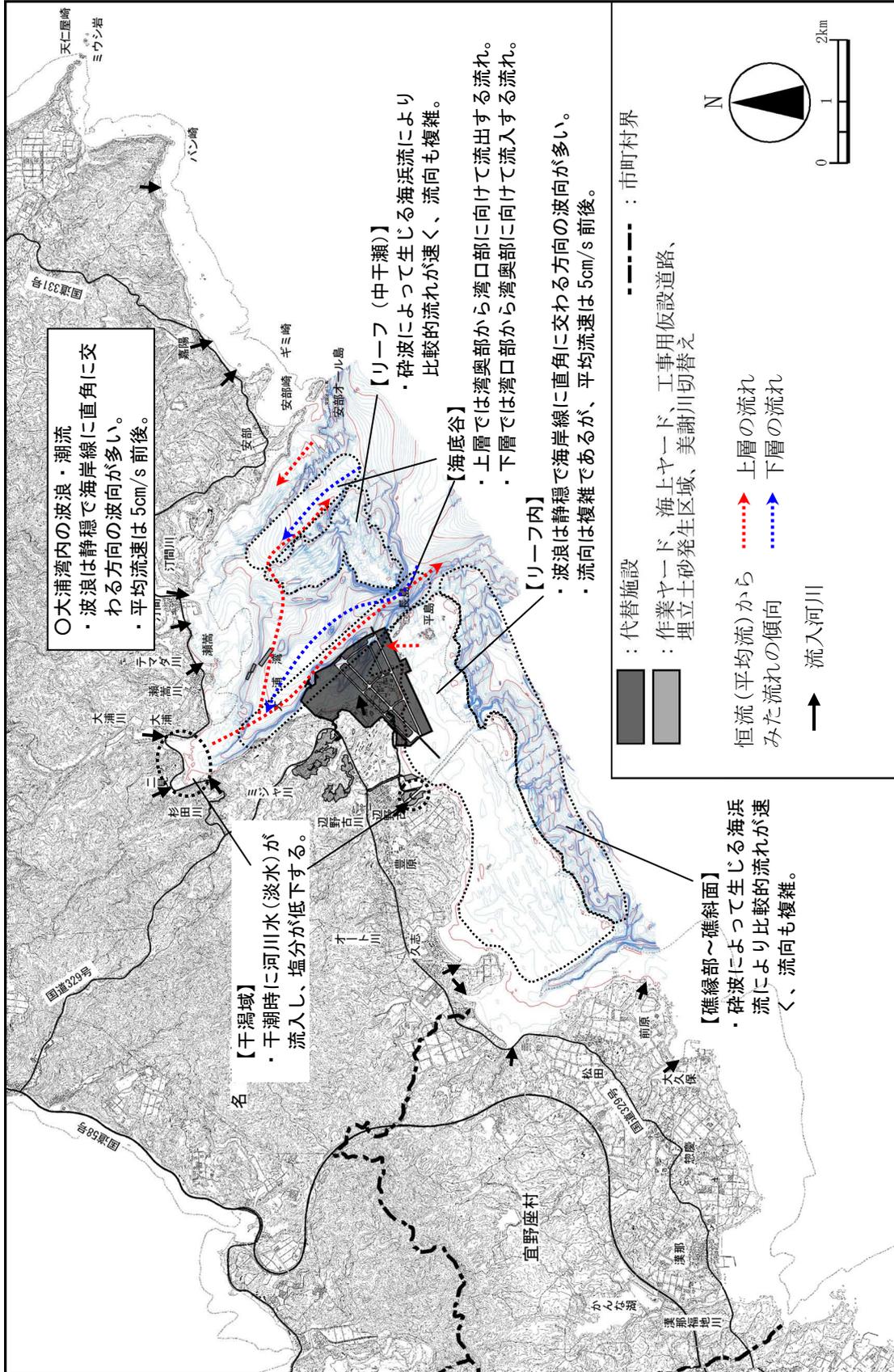


図-6.19.1.1.4 調査海域における波浪・潮流等の状況

d) 海底基質

辺野古崎から西側にかけてのリーフ内は、岸側に砂質もしくは砂礫質が主体の底質が分布し、海草藻場が広く生育しています。その沖側では転石や岩礁が混じるようになり、ホンダワラ藻場が分布しています。リーフ外洋側の礁地形（礁縁部～礁斜面）の海底基質は、全般にサンゴ類・岩礁などにより形成されています。また、潟原、久志及び辺野古川河口の干潟は砂礫質、砂質もしくは砂泥質で形成されており、砂浜はシルト・粘土分をほとんど含まない砂質もしくは砂礫質で形成されています。

大浦湾においては、湾口部中央や安部岬から汀間川にかけてのリーフではサンゴ類・岩礁が主な基質となっていますが、湾奥側では砂泥質もみられます。湾口中央部のリーフ（中干瀬）には岩礁や礫質の場所にホンダワラ藻場の分布域もみられます。一方、辺野古側では、海岸線付近の水深 10m 程度までの海底基質は岩礁、砂礫質もしくは砂質となっていますが、その沖合の急斜面から海底谷へ至るまでの範囲は砂泥質もしくは泥質の基質となっています。湾中央部から湾奥部にかけては、谷地形の底となる水深 25m 程度の海底面は砂泥質であり、水深が浅くなる範囲では砂泥質域もしくは泥質域もみられますが、岩礁、砂礫質もしくは砂質が主体となり、サンゴ類、ホンダワラ藻場もしくは海草藻場も生育しています。汀間漁港から瀬嵩にかけての海岸には岩礁やサンゴ礁が存在していますが、最湾奥部の干潟では、大浦側は砂質、二見側は砂泥質が主体の底質となっています。

大浦湾東側の安部崎からバン崎にかけてのリーフ内は、沖側がサンゴ類・岩礁、その内側（岸側）が礫質もしくは砂質が主体の基質となっています。

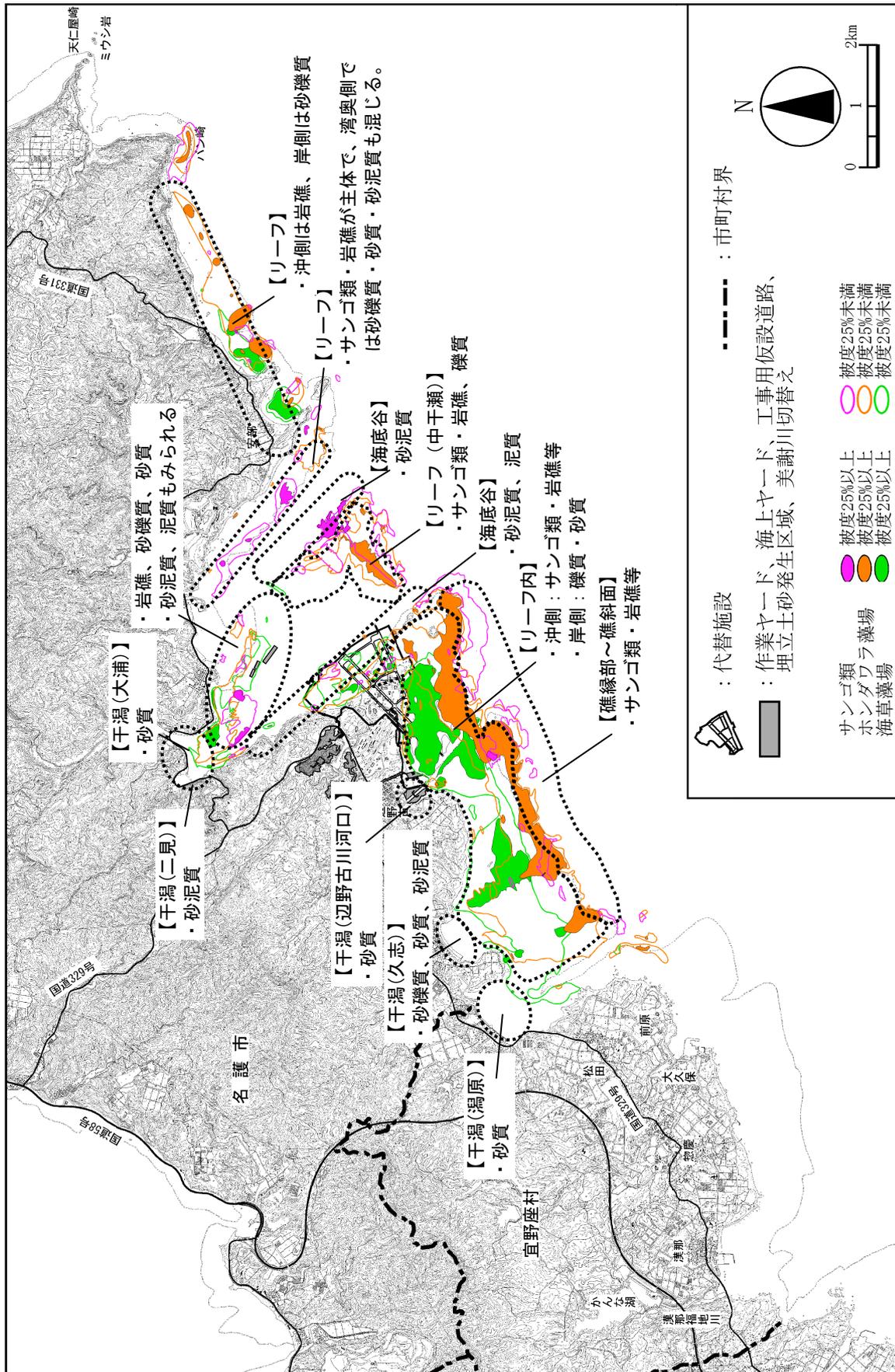


図-6.19.1.1.5 調査海域における海底基質の状況

2) 生物多様性の観点からみた主要生物群の種リスト及び希少性

(a) 主要生物群の確認状況

a) 主な文献その他の資料調査結果

平成 19 年度に実施された事業者による調査の結果を以下に示します。なお、その他の調査結果については「第 3 章 3.1 3.1.5 動植物の生息又は生育、食性及び生態系の状況」に記載しています。

平成 19 年度（夏季、秋季、冬季）のインベントリー調査において、現地での目視観察、写真撮影、標本採取等で記録された種類から、種レベルまで同定されたものについて主要生物群別の種数を整理した結果を表-6.19.1.1.4に示します。

各生物群の種数は、海藻類が 166 種、海草類が 10 種、サンゴ類が 280 種、底生動物が 1,339 種、魚類が 677 種、爬虫類が 5 種でした。これらの合計種数は 2,477 種でした。

表-6.19.1.1.4 インベントリー調査で記録された種数（平成 19 年度）

生物群		門数	綱数	目数	科数	種数
植物	海藻類	3 門	3 綱	21 目	44 科	166 種
	海草類	1 門	1 綱	1 目	2 科	10 種
動物	サンゴ類	1 門	2 綱	4 目	17 科	280 種
	底生動物	13 門	27 綱	83 目	294 科	1,339 種
	魚類	1 門	2 綱	13 目	75 科	677 種
	爬虫類	1 門	1 綱	1 目	2 科	5 種
全生物群合計		18 門	34 綱	123 目	434 科	2,477 種

注) 門及び綱には一部重複があるため、全分類群合計と各生物群の和が一致しません。

(ア) 平成 19 年度夏季

平成 19 年夏季のインベントリー調査において記録された主要生物群別の種数は表-6.19.1.1.5に示すとおりで、各生物群の種数は、海藻類が 129 種、海草類が 9 種、サンゴ類が 227 種、底生動物が 879 種、魚類が 521 種、爬虫類が 2 種で、これらの合計種数は 1,767 種でした。